
ATLAS — 《 L 》 Letter Of You （君に捧ぐ手紙） —

浅野 冬都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ATLAS ― L Letter Of You
(君に捧ぐ手紙) ―

【Nコード】

N9507J

【作者名】

浅野 冬都

【あらすじ】

少年は国境を越えるバスに乗った。
奇妙な乗客7人を乗せて、バスは走り出す――。

走るバスの中で、好奇心に瞳を輝かせた金髪の少女が少年にそっと耳打ちした。

――このバスには、秘密がある――

プロローグ

親愛なるメアリス。

突然の手紙に、君は驚いているだろうか。

いや、君のことだから好奇心に目を爛々と輝かせているんだろう。

なぜ僕が今更になって君に手紙を出そうとしたのか、君は『推理』
して楽しみたがると思うが、たいした理由も無いので、君ががっかりするまえに先に書いておこうと思う。

ただ何となく、突然に、君と会ったあの時の出来事について思い出したんだ。

そう言ったら君は「今までは忘れていたのか」と、頬をふくらませてそっぽを向いてしまっただろうか。

記憶力には自信があるつもりだ。

しかし、どうしても記憶は薄れてしまうのだよ。

でも、こうやってふと思い出す記憶のことはきっと忘れない。

あの出来事のこと、今再び思い出したからには、あと何年かはすっかり忘れてしまうことは無いだろう。

ああ、それと、何の因果か、あれ以来『彼』とも何度も会おう。

君は羨ましいと言うかもしれないが、彼は実に厄介事を運んでくる。

ヤツと僕はある意味同種だが、相容れはしない。

ともかく、今、記憶をよりしっかりと結びつけておくために、僕は
こうして手紙を書いた。

メアリー、そっちは楽しんでるかい？

一章 バスは発進する

シャルワール街ハッペンテールのショッピングモールを経由して、格調高いレンガ造りの建造物を両手に、バスは街を出る。

国境を越えるこのバスが、途中停留するのはそのあとのウエールとシャルブクの停留所で数人を乗せるためだった。

バスの車内は空席が目立った。日にちが悪かったせいもあるが、この辺一番の大都市であるシャルワールの一番街で銀行強盗騒ぎがあったという噂を聞いた。もしかしたらそのせいで外出を控える人も多くなったのかもしれない。

「ねえ、あなた一人で乗ってるの？」

左耳に飛び込んだソプラノが、自分の視線を左へと誘った。

「小さいのに、立派なのね。一人で国境を越えるんでしょう？」

通路を挟んだ左隣の座席には、床に着かない足をばたつかせながら、くりくりした瞳をこちらに向けている少女がいた。

歳は十ほどこだろうか。金髪碧眼で、高い位置でツイントールにした髪は毛先がパーマがかっている。

「君こそ、こんなところで何をしてるんだい」

ゆっくりとした動作で少女の方に顔だけ向けると、少女はませた表情で、弟をたしなめるような口調で返した。

「質問を質問で返すなんて失礼よ。レディーの扱いがなってないなんて、まだまだリトルね」

人差し指を口に当ててくすくすと笑った後、続けて名前を聞かれた。何と呼んでも構わないと答えると、少女は瞳を好奇心で輝かせ、身乗り出した。

「ステキ！ 私、謎が多いのって好きよ。私はメアリス。メアリー
って呼んで、リトル・ウィット」

「リトル・ウィット？」

「そう、貴方の事をこれからそう呼ぶことにするわ。だって、貴方は容姿は子供ですけど、とても聡明そうですね。さっきまで読んでいた本も、なんだか硬い文章だったし。いいわね、リトル？」

「ああ、構わないよ、メアリー」

少し笑ってリトル・ウィットが了承すると、メアリーはリトルの方へとぐぐつと距離を縮めてきた。

「ねえ、知っている？ このバスの秘密」

まるで今からゲームでも始めようかというような、弾んだ声だった。

「これは私だけが知っていることなんだけれどね、このバスの中に……」

メアリーは声の音量をぐつと落として、リトルに耳打ちした。

「このバスの中に、銀行強盗がいるのよ」

二章 バスは止まらない

「このバスの乗客は皆、ずっと見ているとどこか不可思議。見て、一番前の厚化粧マダム、私が知る限りではもう一時間近く化粧をしているのよ」

バスの一番前、左側の席には、横幅のあるマダムが座っていた。足元には有名な洋服店の紙袋が大量に置かれ、マダム自身も大粒のパールネックレスを基本に、大きな宝石をあしらった指輪やゴールドのブレスレットで着飾っていた。メアリーの言うとおりに、先程から手元がせわしなく動き、化粧に余念が無い。

「次は二列目、長いシルクハットの彼。さっきから汗ばかり拭っているし、きよろきよろしてばかり。それに、あのシルクハットはいくらなんでも長すぎよね」

二列目の右側の席には、黒いシルクハットをかぶった男が座っていたが、そのシルクハットは男の頭の大きさの割には大きい気がした。なにより、通常のシルクハットより大分高さがある。

そして、先程からずっとあたりを気にしているようで、時折滲んだ汗をハンカチで拭っていた。

「あとは私達の座席の前の列の東洋人の彼。さっきからずっと眠ってたままよ」

リトル達が座っているのは一番後ろの座席で、その前列の右席には、赤いパーカーを着た男らしき人物がいる。

黒いキャップを深く被って俯いているが、肩が規則正しく上下に揺れている事から、彼が眠っているという推測は容易についた。バスの揺れによって時折ちらりと見える肌と髪の色のからしても、東洋

人の若者であることが分かった。

「東洋人の前の席に座っている男を忘れていないかい、レディー」
リトルは悪戯っぽく笑った。

赤パーカーの東洋人の前の座席には、口ひげを生やした気品のある男性が座っていた。年齢は四十代前半といったところか。

一際目を惹くのは、彼が先程から片時も離さずに抱えている、巨大なトランクだった。大きさとしては十分バスの貨物入れに置いていてもおかしくないものだったが、彼は大事そうにトランクを抱えたまま、俯いた顔は神妙な面持ちだった。

メアリーは咳払いを一つすると、気を取り直したように話を再開した。

「まあ、怪しいのはこの四人ね」

「いや、五人だな」

「あら、私も数にいれるの？ 別に構わないけど、私はリトルを疑ってなんかないから安心して頂戴ね」

軽くウインクすると、彼女特有の好奇心溢れる瞳をリトルに向けた。

「リトル、あなたはと思う？」

「そうだな……それより、メアリーの推理に興味があるな」

「あら、私の？」

「君には良い観察眼があるし、なにより、発想が柔軟で興味深そうだ」

メアリーは優秀なマジックでも見たかのように感激した。

「それはあなたの推理で見抜いたの？」

「どうかな、推理なんてものとはいえないさ。さあ、君の考えを聞かせて、メアリー」

リトルがメアリーの耳元に囁くと、メアリーは少し頬を赤らめたが、

それはすぐに自分の考えを聞かせることができる興奮へと変わった。

「例えば、厚化粧マダムの場合……」

マダムといえば、バスに乗ってからずっと化粧をし続けているのがすごく気になるわ。

ほら、まだ化粧の手を止めない。あんなに厚く塗って、自分の素顔を隠そうとしているのかしら？　なら、マダムが犯人っていうこともあり得なくは無いわね。

だって、女性って厚化粧を落としたら面白いくらいに別人になるでしょ？

そうね、あと、足元の大量のブランド店の紙袋。こんなバスにあんなに高価なものを無防備にしているなんて、女性がすることじゃないわ。

よっぽど盗られない自信があるのか……もしかしたら、マダムは銀行で盗んだお金をさっさと物に変えて国境を越えようとしているのかもしれないわね。

だって、いくらお金持ちそれでも札束を持ち歩いていたら不自然でしょ？

でも、ジュエリーや高価なバッグなんかに変えられていたら、ごく自然に見えるわ。

「リトル・ウィット、何か分かった？」

メアリーは顔を高潮させつつ話を切った。今まで息継ぎもろくにせずに話し続けたのだ。

「分かったよ。君の想像や観察力はじつに愉快だということがね」

「まあ、いやだ。私は犯人を推理して欲しいのに」
メアリーは膨れつつも得意げな表情ではあった。

「では、シルクハットの彼のことはどう思う？」

リトル・ウィットがそう聞くと、メアリーは少し考え込むような動作をして、それから一層声を小さくして続けた。

「実のところ、彼が一番怪しいと思うわ。だって、さっきからきよきよろしてばかり。あ、ほら、また汗を拭った」

長いシルクハットの彼……年齢は二十代後半かしら。でもそれよりもっと歳をとって見えるわね。それは彼がおどおどして、何かにおびえている風だからだわ。

さっきからちらちら後ろを向いたり、横を向いたり。

でも気になるのはあの長い長いシルクハット。あんなのかぶっていたら悪目立ちするわ。

それに、車内でも帽子を取らないのは変よね。

ああ、もしかしたら盗んだお金をあのシルクハットの中に隠しているのかもしれないわ！　だって、いくら何でも大きすぎるもの。もし手荷物を調べられても、帽子の中に入れてたらごまかせそうですよ？

あと、咳払いだって多いわ。

彼が咳払いをするたびに、厚化粧マダムは不機嫌そうに顔をゆがめて彼を見るの。彼はただすまなそうに見返すだけけど……ああ、そう思うと彼が犯人って線は薄いのかしら、だってそんなビクビクしてちゃ、強盗なんてできなさそうなもの。

「困ったわ、一番怪しい人物が犯人とは限らないのね」

メアリーはむうっと手を口元にあてて考え込む。

リトルはその様子に小さく笑った。

「失礼しちゃう。私は真剣に考えてるのに」

メアリーは顔を赤くして、ぷいっとそっぽを向いてしまった。

バスは速度を落とすことなく進んでいく。

特に悪い道というわけでもないのに、バスはよく揺れた。

とうに街は抜けていて、今は荒野を走っていた。タイヤから巻き上がる砂埃が窓を覆い、外の景色は黄色い靄がかかったかのようだった。

ごほん、ごほん。

わざとらしい咳払いが聴こえたかと思えば、シルクハットの男が何度も咳き込んでいた。

車内に男の咳払いだけが何度も響く。

その姿を一番前の席のマダムが恐ろしい形相で睨んでいる。大きなトランクの男も、眉根を寄せた。赤いパーカーの男は相変わらずピクリとも動かなかった。

突然、マダムが睨んだまま手を動かしたので、メアリーは身を乗り出してマダムの行動に注目した。しかし、マダムは上等な布を使ったティッシュ入れを取り出し、ティッシュで鼻をかんだだけだった。

「はぁ……つまんない。ここで拳銃でも取り出したらマダムが犯人決定なのに」

メアリーは力を抜いてバスの座席に背を預けた。金色のツインテールがぴよこんと揺れる。

「それは困るな、こんな狭い車内で銃なんて使われたら危ないじゃないか」

リトルは笑みを浮かべたままメアリーの顔を覗き込んだ。

「あなた、ちっとも困らなさそうな顔をしてるわよ」

「キミだってそうじゃないかい？」

リトルに聞かれ、メアリーは口ごもったが、「イジワルね」とだ

け言って頬をふくらませた。

「さあ、推理の続きをしようじゃないか」

「あら、乗り気ね、リトル」

「キミの観察眼は実に面白い。知的好奇心を掻き立てられる」

リトルの賛辞に気を良くしたメアリーはリトルのほうに再び近づいた。

「そうね、次は東洋人の彼よ」

彼は……そうね、十代くらい？ それとも二十代のはじめくらいかしら？ とにかく若く見えるわ。

でも、彼のことは良くわからないわ。だって、ずっと眠ったままなんですよ。

でも変よね。こんなに揺れるバスの中で、平然と寝ているんですもの。

もうっ、また揺れた！

街の中を走っている時だって、カーブをぎりぎり曲がっていたし、ガードレールに擦っていることもあった……なんて雑な運転かしら。信じられない！

……ああ、もう、東洋人の彼の話だったのよね。

そうね、彼は帽子で隠れているから顔は見えないけれど、平凡そうで、銀行強盗には見えないわ。

でも、推理小説では一番犯人ではなさそうな人が犯人であることが多いのよ、だから、彼が犯人って線も捨てきれないわね。

例えば、彼は留学生で、こっちの学校に通っていた。でも、貧乏な苦学生だから生活していくお金がなくて銀行からお金を奪った。あとはこのバスで国境を越えて、適当な空港から東の故郷まで帰ってしまえば、警察はそうそう追えないでしょうね。

うーん、でも、帽子を深く被っているから学生っていう確証はないわね。実はかなりの年齢だったりして。

ああ、でも時折見える白い肌は艶やかで、肌理細やかそう。彼は絶対若いわ！

赤いパーカーはちょっと派手だけど、あれは東洋のセンスなのかしら？

でも、男が赤なんて、浮わついてだめ。男はね、黒やグレーのスーツをびしっと着こなすくらいの紳士にならなきゃダメよ。

いい？ リトル・ウィットもそういう男性にならなきゃダメよ。

あなたは顔立ちはとても整っているから、将来は絶対いい男になるわ。でも、顔がいいからってそれだけで女の子にちやほやされてちやダメよ。ほんとうにいい男っていうのは、一人の女性を生涯愛し続け、時には厳しく、時には穏やかに周りに接するような人よ。

メアリーは力説した。途中から論点がずれていたのだが、彼女は実に満足そうだ。

「わかった？ リトル」

自分の意見に同意を求めて、メアリーは真剣にリトルを見つめる。

「よく、分かったよ」

リトルは柔らかい微笑を浮かべて返事をした。

メアリーはそれを見て顔を赤らめ、視線を泳がせた。

「わ、分かればいいのよ」

赤くなった自分の頬を両手で包み込んで、リトルに背中を向ける。小さな背中がさらに小さくなっていた。

じきにメアリーは気を取り直すようにリトルのほうに勢いよく向き直った。

「さあつ、つぎよ！ 次にいきましょう！ 次は……」

メアリーは語尾を弱めた。

急に落ち込んだように俯き、ツインテールの先っぽを小さな指でいじりだした。

「次は……そうね、あの大きなトランクの紳士よ」

「それについては僕の意見をキミに聞かせよう」

リトルの申し出に、メアリーの表情がぱあっと明るくなる。

「あなたの推理を聞かせてくれるのね？」

「いや、あくまでもキミが今まで言ったような考察に過ぎないよ。

キミの観察眼には負けるかもしれないけどね」

大きなトランクを抱えた紳士……そうだな、彼は口髭を生やしていて、顔も疲れきっているように見えるところから、かなり歳をとって見えるな。

しかし、顔つきはしっかりしていて精悍だ。こげ茶のスーツを着こなし、頬はこけているが目尻は優しげで、口元は固く閉ざされている。

まさに、メアリー、キミの言っていた『理想の男性』を絵に描いたような紳士だ。

しかし、気になるのはあの大きすぎるトランク。あれは仕事用のスーツケースというより、旅行用のトランクだ。大きな荷物は皆、バスの下の貨物入れに入れているのに、なぜ彼はそのまま座席に持ってきたのだろうか。

座席はそんなに広くはないから、実に窮屈そうだ。しかも、彼はそのトランクを、宝物でも抱えるかのように大事に両手で抱いている。彼の表情も不可解だ。このバスの乗客の中で一番沈んだ表情をしている。生真面目そうな男に見えるのに、スーツもしわがついてよれているし、身だしなみに気を使っているようには見えない。

「彼は一体なぜこのバスに乗っているのか……そしてあの大きなトランクの中身は何なのか……」

リトルは自分の考察を話終えると、メアリーのほうに首を傾けた。

メアリーはリトルに向かってニツコリ微笑んだ。

「これで乗客全員の観察は終わりね。といっても、今日の乗客はズいぶんと少ないけど」

「しかし、人数が少ないからこそ、それぞれの行動の奇妙さが際立って見える」

リトルは傍らに置いていた分厚い本を手に取り、それを読むわけでもなく、開いたり閉じたりして弄んだ。

「全員怪しくて、全員怪しくなくも見えるわ……はあ、頭がパンクしちやいそう。人を観察してあれこれ想像するのは好きだけど、人を疑うのって、いい気分じゃないわ」

メアリーは靴を脱いで、自分の足を座席の上で抱えた。右足、左足、右足と、交互につま先をばたばた動かす。

やがてメアリーは足の動きを止め、驚いたかのように肩を跳ね上がらせた。

「たいへん！」

その声は今まで小声で話していた分、かなり大きく聴こえたが、乗客は誰一人として振り向かなかった。

かわりにシルクハットの男がまた咳払いをし、マダムはくしゃみを二度してから鼻をかみ、化粧を直した。

三章 バスは急停車する

「何が大変なんだい？ メアリー」

リトル・ウィットは少し目を丸くして小声で尋ねた。

「彼が目を覚ましたわ！」

メアリーが興奮気味に言うので、彼女の指さす方向に目をやると、斜め前のシートで赤いパーカーの東洋人が帽子をとり、欠伸をしていた。

眠そうに細められた瞳は漆黒で、帽子の中からあらわになった髪も、同じく漆黒だった。

髪は頬に多少触れるくらいの長さなので、ショートカットの女性に見えないことも無い。

しかし、長い手足や大欠伸をしている様子からすれば陽気そうな青年にも見えたりと、横顔だけではいまひとつ判断しかねた。

「リトル……彼は犯人じゃないわ」

メアリーはぼつりとそんなことを言うので、リトルがなぜかを聞こうとした瞬間、メアリーはぐるりと顔をこちらに向けた。その瞳は好奇心とは別の輝き方をしている。

「だって彼、とってもハンサムなんですもの！ あの中性的なお顔

立ち！ まさに東洋の神秘ね！」

メアリーは瞳を輝かせて東洋人の彼を見つめる。リトルは思わず呆けてしまった。

「い……いや、メアリー？ そんな基準で安易に決めていいものなのかい……？」

「あら、心配しないで、リトル。あなただってとっても整った顔立ちをしているわ。何年かすれば貴方だって彼くらいハンサムになるに決まってるもの！ でも、今はまだハンサムというよりはプリティーになってしまふのよね。まあ、それはそれで素敵なのだけれど」

メアリーはリトルの頭を子供をあやすかのように撫でたあと、東洋人の方をうっとり眺めた。

赤いパーカーの東洋人はこちらに気づく様子もなく、帽子を浅く被り直すと、傍らに置いてあった新聞に目を通しはじめた。

「残念ね……私があと十年早く生まれていたら、彼にアプローチするのに」

メアリーは冗談交じりに言って、首を振った。

「でもいいわ、今はリトルで我慢してあげる」

そう言ってリトルにウィンクした。リトル・ウィットは女性の逞しさを今、目の前で再確認させられつつ、メアリーの言葉に苦笑いをした。

「んもうっ！ 不服そうな顔ね。見てなさい、私だってあと十年もすれば男の子がみんな振り向くくらい的美女になるんですから！ そのとき後悔しても遅いんだからねっ」

メアリーの言葉に、今度リトルは真剣な表情になって、目線を窓の外に向けた。

「……ああ、バスがもう街に入っていくよ」

「そうね、でもここには停留しないわ。通り過ぎていくだけの街よ」
「さあ、推理を再開しよう、メアリー。バスが国境を越える前に」

バスは街に入った。

石造りの家々が立ち並び、洗濯物を広げる女性達が談笑している。両側を家に挟まれた道路は狭く、バスは終始、速度を落としがちだった。

右へ左へとヨロヨロしながらバスは進んでいく。途中家にぶつかりそうな程すれすれで通った場面もあった。

バスの中は静まり返っていた。

たまにシルクハットの男の咳払いがきこえ、マダムがくしゃみをして鼻をかみ、すぐさま化粧をし始めるのだった。

赤いパーカーの東洋人は新聞を見ていたかと思えば、今はその新聞を顔にかぶって眠っているようだった。大きなトランクの男はトランクを抱えたまま俯いていた。

メアリーは小さな指を口元にあてて考え込んだ。考えに詰まって

唸るたびに、二つの金色の髪の毛がぴよこぴよこと揺れる。

「ねえ……リトル？ さっきから私ばかり考えているけど、あなたもちゃんと推理しているの？」

大きな青い瞳がリトルを見つめる。リトル・ウィットは手に持った本を開いたり閉じたり、ページをパラパラめくったりしていた。

「考えているよ」

短い返事に、メアリーは「もうっ」とふてくされて自分の膝を抱える手に力をこめた。

メアリーは膝を抱えたまま車内を観察する。シルクハットの男が帽子を両手で直していた。バスの揺れで帽子がずれてしまったのだろうか。

一番前の座席のマダムは睨むような視線をシルクハットの男に向けている。思えばマダムは頻繁に後ろを振り向いている気がする。

赤いパーカーの男は相変わらず眠っている。

大きなトランクを抱えた男は、周りの様子を気にする事も無く、大きなトランクを抱えたまま、地面を見つめていた。

「リトル、たゞいへん！」

二度目の「大変」に、リトルは肩をすくめつつメアリーの方を見た。

大きな声を出したメアリーだったが、他の乗客たちはわざわざ振り向いてメアリーを睨むなんてことはしなかった。代わりに、赤いパーカーの東洋人だけが肩をぴくりと動かした。

「何が大変だって？」

リトルは首を傾けてメアリーに尋ねた。

「もうっ、そんな呆れた目で見なくてもいいじゃない。今度はすごく重要な事に気が付いたのよ」

メアリーは胸を張って答える。リトルが「どんなことに気づいたのか」と尋ねるまで、十分に溜めて、言葉を放った。

「共犯者よ。私達はその可能性をすっかり忘れていたんだわ！」

メアリーは世紀の大発見でもしたかのように目を爛々と輝かせた。

「乗客たちを一人ずつ見ていくと、どうにも犯人だという決め手に欠けるわ。でも、もし共犯者がいたとしたら？　だって、銀行強盗なんて大それたこと、一人じゃ無理だと思わない？　きっと銀行へは二人か、それ以上の人数で押し入ったのよ。それで、各自他人のフリをしてバスに乗り込んだのよ！」

ああ、それなら一番あやしいのは厚化粧マダムとシルクハットの彼ね。

さっきから男は不自然な行動ばかりだし、無駄に咳払いをするわ。そしてそのたびにマダムは後ろを振り向いているってことは……これはきつと何かのアイコンタクトをしているのね！　犯人達にしか分からない合図があるのよ、きつと。

それに、盗んだお金だって、マダムはジュエリーなんかに変えて、シルクハットの彼はあの長いシルクハットの中に札束を隠しておけば誤魔化せるんじゃない？　そして、彼らは他人のフリをしてバスから降り、どこかで再び合流するのよ！

「しかし、それだとおかしいなあ。他に国境を越えるバスなんていくらでもあるんだから、犯人が彼らなら、同じバスに乗って他人のフリをするよりも違うバスにそれぞれ乗ったほうが効率が良いとは思わないかい？」

メアリーはこの意見に「そうよね」と返事をしたものの、どうにもリトルの座っている方向からは聞こえてこなかったことに気づき、驚いて声のした方を見た。

「坊っちゃんगत、どうにも物騒な話をしているねい」

不思議な響きの声が耳元で囁く。

メアリーの隣にはいつの間にか、さっきまで自分の座席で眠っていたはずの赤いパーカーの男が座っていた。

「あ、あなた！」

メアリーは目を丸くして固まった。リトル・ウィットも驚いて男を見た後、少し男から離れるように席をずれた。

「こんな辺境のバスで乗り合わせたのもきつと何かの縁なのかな。まさかこんな所で同種に出会うとは思ってもみなかった。縁とはじつに奇であり、可笑しくて、面白いものだねい」

リトルは東洋人の言葉に、訝しげな表情をし、メアリーは言葉の意味が理解できずに、不思議そうに首を傾げていた。

その様子を見て、東洋人は中世的な顔で優しく微笑み、メアリーに尋ねた。

「隣、座ってもいいかな？」

メアリーが緊張しながらこくりと頷くと東洋人はメアリーの隣の空席に座った。リトルと東洋人とでメアリーを挟んで座るかたちになる。

「お前……なぜ」

リトルが訝しそうに東洋人を見ると、東洋人は陽気に片目を瞑り、口元に人差し指を当てた。

リトルは怪訝そうな表情のまま口を閉じた。

「綺麗なブロンドだね。キミの名前は？」

東洋人がメアリーに微笑を向けると、メアリーは頬を赤らめて自分の髪の毛の手で撫でた。座席にあげていた足を下ろし、靴を履かずに足を空中でぶらぶらと彷徨わせる。

「メアリス……でも、人に名前を聞くときはまず自分から名乗るのよ」

そう言いつつも彼女は恥ずかしそうに視線を床に落としている。

「そう、メアリス……ああ、そうだね。こんな可愛らしいお嬢ちゃんにマナーを注意されるなんて、恥ずかしいなあ」

東洋人は陽気に笑いながら小声で返した。

「ワタシの名前はアレイ。霜久佐アレイだ」

「しもくさ？ それは東国の名前なの？ 変わってるわね」

メアリーが興味津々にアレイの方を見ると、アレイは思い出したかのように付け加えた。

「アレイがファーストネームさ。うっかりしてた、こっちは名前を先に言うんだったねい」

そう言ってアレイはリトルのほうを見た。

「どうぞ以後お見知りおきを」

「……」

リトルは答えず、目を細めるだけだった。

「この子はリトル・ウィット。わたしが名付けたのよ」

メアリーはリトルを手で示しながら、自慢げに笑う。

「そうか、よろしく、リトル」

アレイはリトルに向かって微笑んだあと、小声で続けた。

「ところで、キミたちはずいぶんと物騒な話をしていたようだけど、ゲームか何かの話？ それともテレビ？」

「いいえ……それは、その……」

メアリーが口ごもってリトルのほうをちらりと見ると、リトルが助け舟を出した。

「いいと思うよ。言っても」

リトルが表情も変えずに言うので、メアリーは決心したようにアレイに向き直った。

「いい？ 誰にも言っちゃダメよ？ 絶対よ？」

メアリーがリトルのときと同じようにアレイに耳打ちする。

「このバスには……銀行強盗が乗ってるのよ」

話を聞いても、アレイは表情を変えなかった。

しかし、リトルが観察するようにこっちを見ているのに気づき、メアリーに向かって驚いてみせた。

「そりゃ物騒だなあ……それでキミ達が犯人を捕まえようとしてくれていたわけかい？」

「そうよ、私達が推理していたの。ね、リトル」

メアリーが気の強そうな瞳をリトルに向けると、リトルは「ああ」と軽く同意した。

そんな様子を見て、アレイは困ったように笑いながら肩をすくめた。

「だーめだめ、そんな危険な事は大人に任せなくちゃ。……子供は子供らしく、アニメでも見てたらいいよ」

そう言ってポケットに手を入れると、かちやり、と何かがぶつかる音と共に、黒い塊を取り出した。

——リモコンだった。

確かにこのバスには、一番前に大きなテレビが備え付けられている。だが、乗車してからずっと電源は付いていなかった。

アレイはリモコンをテレビに向け、スイッチを押した。

『こちらは現場です。先日起こった銀行強盗事件は現在も警察による懸命な捜査が続いています。犯人は未だ逃走中。覆面をしていたため犯人の詳しい情報は未だ掴めていません。街の中心銀行でもあったため、銀行を利用していた住民には不安の色が浮かんでいます』

急にテレビが大音量で入り、乗客たちは皆、驚いてテレビ画面を見つめた。

突然、バスが急ブレーキをかけ、乗客は前に身を乗り出すはめになった。

『犯人は先日、この銀行に押し入り、銀行員に拳銃を突きつけ現金を奪い、逃走。早朝であったため警備が手薄だったこともあります。が、一人の強盗犯に大金を盗まれたというのは、警備体制の見直しも必要なのではないでしょうか。』

なお、丁度その場に居合わせた何人かの一般市民も巻き込まれ、そのうち一名は——』

そこまででテレビの電源が消された。

「ああー、びっくり。なんて大音量だ」

消したのはアレイのようだった。片手で耳を塞いでいる。

「あんたちよっと！」

バスの運転席から男が大股に歩いてきた。男は眉根を寄せている。

「困るんだよ、勝手にいじられちゃ！」

運転手が怒鳴ると、乗客たちは一斉に後ろを向いた。

「あははー、すいません。返します」

悪びれた様子も無く、アレイは手に持っていたリモコンを運転手に渡した。

運転手はそれを奪うと、再び大股で運転席に戻っていった。

バスが走り出す。

厚化粧マダムはまだアレイを睨み、小言をもらしている。

シルクハットの男はハンカチで汗を拭ってから、先程の急ブレーキでずれそうになった帽子を両手で慎重に直していた。

急に鼻をすする音が聞こえたかと思って、音のする方向を見ると、大きなトランクを抱えた男が目頭をハンカチで拭っていた。

次第に肩も震え出し、ハンカチで顔を覆いながら啜り泣きを始めた。

静かな車内の中に、男の啜り泣きが小さく響く。

時折シルクハットの男が咳払いをし、厚化粧マダムは鼻をかんだ。

霜久佐アレイは、その様子を獣が狩りを始めるかのような鋭い目つきで見ている。

リトルがアレイの方を疑わしげに見つめていることに、アレイは気づいていないようだった。

アレイは乗客に視線を集中させたまま、座席に座り直す。かちゃん、という音と共に、先ほどのリモコンとはまったく異なる形の黒い塊がちらりと見えた。

その瞬間、リトルの目が驚いたように開かれた。

「お前……」

リトルがぼつりと言うと、アレイははっとしたようにリトルの方を見て、鋭い視線を向けた。リトルは怯むことなく見返す。

アレイはリトルから視線を外すと、ポケットに手を入れ、足を組んで座席の背もたれに体を預けた。

「ごんねんだわ……」

ふと声がしたので、リトルとアレイは声のしたほうを驚いたように見つめた。

視線の先で、メアリーはむっとした表情で腕を組んでいた。

「聞いた？ 犯人は一人ですって。共犯って線はナシね」

言ってから、わざとらしくため息をついた。

「推理はふりだしね」

バスは街を抜け、再び荒野を走り出した。相変わらずバスはよく揺れた。

「いや、ふりだしではないよ」

ふと、そんな言葉が聞こえたので、メアリーは再び目を輝かせた。
「推理できたの？ リトル・ウィット！」

手を組み合わせて羨望の眼差しを向けるメアリーの肩越しに、アレイが冷ややかな視線を向けていた。

しかし、リトルは構わず続ける。

「メアリー、確かにキミの言うとおり、強盗犯はこのバスに乗っている」

「それは一体誰！？ 厚化粧のマダム？ シルクハットの彼？ それとも……大きなトランクの紳士？」

メアリーがリトルのほうに身を乗り出す。

「やっぱりマダムの厚化粧は犯人である自分の人相を誤魔化すため？ それとも、あの長い長いシルクハットの男の帽子の中には盗んだお金が入っているの？ それとも……あの大きなトランクに盗んだお金が？」

「メアリー、あせってはいけないよ」

リトルはメアリーの口元に人差し指をあてた。

「さっきのニュースでも言っていた通り、犯人は拳銃を所持している。うかつに犯人の名前をあげたら、他の人に危害を加えるかもしれない」

「そ……そうね、そうよね」

メアリーは急に勢いを無くした。顔色を青くして、座席の背もたれに体を預けた。

「顔色が悪いよ、メアリス。大丈夫かい？」

アレイが柔らかな微笑を浮かべてメアリーの顔を覗き込んだ。

「え、ええ……大丈夫よ」

そう言っただけメアリーは首を軽く振り、立ち上がった。

「それで、この中の誰が犯人なの？ わたしには教えてくれるでしょう？」

「ああ。でも、君は勘違いをしている。僕は最初に言ったはずだ。犯人は5人の中の誰かだ」と

「私は犯人じゃないわ！」

「……メアリー、君はどうして銀行強盗がこのバスに乗っていることを知っていたんだい？ 君は、どうしてこのバスに乗っているの？」

「それは……」

メアリーが言いかけたとき、騒音と共にバスが大きく揺れた。窓は黄色い靄で埋め尽くされる。

「きゃ……」

メアリーは突然の揺れにバランスを崩し、倒れそうになった。

アレイが思わず手を差し出す。

だが、二度目の大きな揺れによってアレイもバランスを崩しかけ、前の座席の背もたれを掴んで体を支えた。

かしゅん、と音がした。

「な、なんだコレ！？」

男の叫び声と同時にマダムの悲鳴が聞こえた。乗客たちは皆、床を見つめている。

——拳銃だ。

アレイのポケットからこぼれ出たそれは、バスの急ブレーキと共に前の席のほうに向かって滑っていったのだ。

「アレイ、あなた……」

メアリーが呆然とアレイを見つめ、アレイは表情も変えずにメアリーから目をそらした。リトルは無言でアレイを見ている。

「拳銃よ！ まさかあのニュースの銀行強盗の！？」

その間にも車内は混乱状態だった。マダムが立ち上がって叫び、シルクハットの男は長い帽子を押さえておろおろとしていて、大きなトランクの男は怒るような目で拳銃を睨みつけ、立ち上がった。

バスが停まった。

「アレイ、あの拳銃はあなたが持っていたのよね？ まさか、あなた……」

メアリーはアレイからあとずさる。

「霜久佐アレイ、拳銃を拾え！」

急にそんな声が聞こえ、アレイは弾かれたようにメアリーの横を通りぬけていった。そのまま拳銃が転がった方へと滑り込む。

マダムの甲高い悲鳴が聴こえた。

どこからか、ばさばさと真っ白なハトが飛んできて車内を飛び回る。ハトが飛び回る中心で、アレイがしゃがんだまま拳銃を手にしている。

そのままアレイが叫んだ。

「早くしろ、だから、誰なんだ！」

リトルはアレイに向かって答えた。

「犯人は乗客の中にはいない！ 犯人は……っ」

カチャリ、とアレイの頭に拳銃が突きつけられた。

アレイは自分の手に持った拳銃を上げるタイミングを失い、そのまま動作をピタリと止めた。

「そこまでだ」

拳銃を突きつけている男は冷たい口調で言い放った。

「銃を渡せ」

アレイはゆっくりとした動作で拳銃を男に差し出す。

男はそれを受け取ると、苛立たしげにアレイを見下ろした。

「なんでこんな物騒なものを持ってるんだか知らないが、おかげで俺は国境を越える前に正体を明かすハメになっちゃったじゃねえか」

「……あら、俺、まっさきに殺されちゃうんですかねい」

アレイは両手を挙げつつおどけてみせた。

「でも、ひとつ言わせてもらうけど……あんたの運転、最悪だったぜ」

アレイが片目を瞑って見せると、男は拳銃を突きつけたままニヤリと笑った。

「生憎ここまで大型の車を運転したことはなかったもんでな。運転の方法は把握していたが、こうも巨大だとも距離感が分からないくてね」

男――運転手はアレイの頭に銃をおしつけた。

「ま、ここまでお前らが事故で死なずに済んだのは俺様のおかげだ、感謝しな」

「こっちはおかげでずっと車酔いだよ。寝てないとやってらんなかった」

アレイの憎まれ口に、運転手は苛立ったように目を細めた。

「俺はなあ、すでに一人殺してんだよ。もう一人も二人も変わんねえ。あんまりなめた口きいてると、この頭の風通し良くなるぜ」
ぐっと銃口を頭に押し付けられ、アレイは顔を歪めた。

「どうしましょう、どうしましょう、リトル！ アレイが……アレイが！」

メアリーは前の座席の方で起こっている出来事に混乱し、目に涙を滲ませていた。

「落ち着いて、メアリー。あの男はそう簡単には死なないさ」

リトルが前の様子から視線を離さずにメアリーに言う、メアリーは何度も首を振った。

「ばか！ 人はね、銃の前では無力よ！ あの引き金を引かれたら終わり、あっという間に人なんて死んじゃうんだからっ」

リトルは少し俯いた後、メアリーの方に向き直った。

「大丈夫。僕が何とかするよ」

そう言って、メアリーの瞳から零れ落ちた涙を指でそっと拭いた。

「僕なら解決できると思ったから、最初に僕に話しかけたんだろう？」

リトルが静かに微笑むと、メアリーは涙をぼろぼろこぼしたまま、

胸を張った。

「そうよ、わたしの目に狂いはないはずよっ」

「お前ら全員手を挙げろ！ 他に武器を持ってるやつはいねえだろうな！」

犯人が叫び、乗客一人一人を目で確認する。

「ん？ 何だ、お前！」

リトル・ウィットのところで視線が止まり、リトルを睨みつける。

「お前、ガキ一人で乗ってるのか？ 親はどこにいった！」

リトルは座席から立ち上がり、犯人の方へ歩み寄っていく。

「親などいない」

言いながら進んでくるリトルを、アレイは真剣な表情で見ていた。

リトルはアレイの方をちらりと見たあと、すぐに視線を犯人の方へと戻した。

「生意気なガキだな！ おい、止まれ！」

犯人が叫ぶが、リトルは止まらない。

「貴様は先日、銀行に押し入った。一人で決行したくらいだから、かなり計画を練っていたんだろう。けれど、当日ミスをしてしまった。銀行に来ていた一般人を殺してしまったんだ。だから、早々に国を出て逃げなければいけなくなった。前もって計画していた通り、この国境を越えるバスの運転手に成り代わったというわけだ」

リトルが冷静に言うと、犯人は額から冷や汗を流した。

「気持ちが悪いガキだな……推理ごっこはそれで終わりかい」

「貴様の不運は、このバスに乗ったことだ。お前はもう、逃げる事はできない」

リトルはゆっくりと近づいていく。

犯人はリトルの落ち着いた様子に、背筋がぞつとするようなものを感じた。

「止まれ、止まらねえと撃つぞ！」

「さっき『一人殺したからもう何人殺そうが変わらない』と言ったな？　しかし、それは大きな間違いだ。人間はよく天国や地獄という言葉を使うな。そんなものは空想だと笑う人間もいるが、では、どうしてそんな言葉が生まれ、今もお当然のように存在していると思う？　――あるんだよ、地獄ってやつはさ。本当にあるから地獄なんて言葉が消えることはないんだよ。だが、残念だな。現世で人を殺し、他人の命まで背負う事になった貴様にもはや安楽などない。我々のような者は、それが分かっているから他人の命を奪うなどという愚かなことはしないのだよ」

「お前、頭おかしいんじゃないのか！　止まれっ……止まれって言ってるだろ！」

犯人は銃をアレイの頭に強く押し付けた。

「貴様は裁かれるべきだ。なによりそれを、お前が殺した者が願っている。お前は偶然により逃亡に失敗したわけではない。必然よって阻止された！」

「なにごちゃごちゃ言ってるんだ！　もういい、お前から殺してやる！」

犯人はアレイに押し付けていた銃口をリトルの方へ向けた。

狂気に満ちた目がリトルを捕らえ、引き金が引かれた。

ばんっ、と大きな銃声が響いた。

どこかへ隠れていたハトたちがまた騒ぎ出し、車内を飛び回った。

リトル・ウィットはその場に倒れた。

犯人の男がニヤリと笑った瞬間、男が構えていた拳銃が突然消えた。アレイによって銃を蹴り飛ばされたと気づき、アレイから奪っていったもう一丁の銃を慌てて構えた。

蹴り飛ばした銃を掴んだアレイと犯人はお互いに銃口を向け合ったままピタリと動きを止めた。犯人の額に汗が滲む。

静まり返ったバスの中だけ時の流れが止まった。

再び時が動き出したのは、真っ白なハトがバサバサと飛び立ち、犯人の視界を遮った時だった。

犯人は焦って銃の引き金を引くために指に力をこめる。

ごーん、という奇妙な音が響いた。

何が起こったのか分からず、犯人の男は驚いた表情のまま床に崩れ落ちた。

アレイは素早く男の両手を背中に捻り上げ、自分の腰のベルトから手錠を取り出して男の両手を拘束した。

「リトルっ！」

メアリーがリトルの元へ駆け寄る。

「死んじゃダメ、だめよ、リトル！」

床にうつ伏せに倒れているリトルに顔をうずめ、メアリーはわんわん泣いた。

「だから言ったじゃない！ 銃はとっても恐ろしいのよ、って！」
メアリーはツインテールを震わせながら大粒の涙をこぼし続けた。

四章 バスは国境を越えない

アレイは気絶している男を、シルクハットの男から受け取ったロ
ープで座席に縛りつけた。

ハトが再び、ばさばさと頭上を飛んでいる。

今まで放心状態だったマダムが、自分の大きなくしゃみで我に返り、
怒りで目を爛々とさせた。

「やっぱりあんた！ 車内に鳥を連れ込んでたんだねっ！」

シルクハットの男がマダムに怒鳴られて小さくなる。男が脱いだ
シルクハットからは、何匹かハトが出てきた。

「あんた、ハトが帽子の中で鳴くたびに咳払いして誤魔化してたみ
たいけど、鳥嫌いのあたしにはしっかり分かったよ！」

「すみません……マジックの大事なパートナーなんで、狭い貨物室
に入れておくのは可哀想だと思ったんです」

「あたしはアレルギー持ちなんだよ！ 羽毛でさっきからくしゃみが止まらないったら……はつくしょん！」

「……まあまあ、このマジシャンのおかげで犯人を縛るロープもあったし、その辺にしてくれませんかねい」

アレイが二人の間に割って入り、マダムにハンカチを差し出す。

「ね、勇敢なマダム」

マダムはハンカチを受け取ると、気まずそうにそっぽを向いた。

「助かりました、貴女のおかげで」

アレイが片目を瞑ってマダムが手にしているフライパンを指さした。

マダムは仁王立ちでフライパンを手を持っている。

アレイと銃口を向け合っていた犯人を後ろからフライパンで殴って気絶させたのだ。

「いやはや、女性の強さには恐れ入りますね……」

シルクハットの男は肩にハトを数匹のせたまま、アレイと顔を見合わせて笑った。

「ええ、本当に女性なら、ですけどねい」

そのマダム足元に置いてあるブランド店の買い物袋は、混乱のせいで何個か倒れていた。紙袋の中から安物のナベなどの調理用具や日用品が転がっていた。

くしゃみで崩れかけた厚化粧のマダムの顔をじっと見てみると……シルクハットの男は目を丸くした。

「あれ、もしかして……」

「失礼ねっ、心は女よっ」

マダムは怒ったように顔を背けてしまった。

「こ、これはその……あれよ。あたしは新しい国で女性として新しい生活を送ろうと思っていたのよっ」

見栄を張って袋こそは高級であったが、中身は安い日用品。

マダムは厚化粧で男らしい素顔を隠していた、男性だったのだ。

「そういうアンタは？ 何で銃なんか持ってバスに乗ってたんだい。まさかバスジャックをしようとしてたなんて言わないだろうね」

そう訊くマダムに向かって、アレイは右手の人差し指を口元にあ

て、左手でポケットから何かを取り出して見せた。

「こういう者です」

アレイが差し出したものを見て、マダムとシルクハットの男はぽかんと呆けてしまった。

五章 なぜ君はバスに乗っていた

「……耳元で声が響くよ。メアリー」

小さくそんな声が聞こえ、メアリーは目を丸くして泣き声を止めた。

リトル・ウィットが頭を押さえながらむくりと起き上がる。

「大丈夫、死んでないよ」

「リトル……っ、無事なのね？ 生きてるのね!？」

メアリーは再び涙を流して、リトルに抱きついた。

「でも、どうして？ あんなに近い距離で撃たれたのに」

リトルは心臓の辺りを手で押さえたまま答えた。

「弾が偶然それなんだよ。ケガもない」

「まあ、あなたは神の子ね！ 神様から祝福された、ラッキーボーイなのよ!」

メアリーは感激して、目を潤ませたままリトル・ウィットに抱きついた。

「きみ、大丈夫かい？」

メアリーの後ろから声が降ってきた。

見ると、大きなトランクの紳士が心配そうに覗き込んでいた。

「ええ、大丈夫です」

リトルは言って、紳士から差し出された手を取り立ち上がった。

「まさかあの犯人が同じバスに乗っていたなんて……！」

紳士は目を吊り上げて男の方を睨みつけた。強く握った拳が小刻みに震えている。

「……あなたは何故このバスに？」

リトルが静かに尋ねると、紳士は怒らしていた目に冷静さを戻してから答えた。

「私は自分の国に帰る途中だったんだよ。……旅行に行ってたんだ。家で妻が待ってる」

「二人で？」

リトルの言葉に紳士は目を丸くした。

「なぜそう思ったんだい」

「……トランクが、大きかったものでね。二人分の荷物が入ってるんじゃないかと」

リトルの言葉に紳士は硬く目を瞑って、何かを振り払うように首を何度か振ってからリトルを見つめた。

「きみ、今回は偶然弾がそれたからよかったが、銃に近づいていくなんて危険すぎる！ 人間は、銃の前では……無力なのだから」

リトルをたしなめるように言った後、リトルの頭を掌で優しく叩い

た後、紳士は自分の席に戻ると、頭を抱えるようにして座った。
紳士の足元には、ずっと大事に抱えていた大きなトランクが置いてある。

「メアリー、犯人は捕まったよ」

リトルが紳士の方を見たままメアリーに言う。メアリーは微笑みもせずに真剣な眼差しでリトルを見ていた。

「でも、違うんだろ？ 犯人を捕まえて欲しいというのが望みじゃないんだろ？」

「いいえ、捕まえて欲しかったわ。だって、あんな凶悪な男、野放しにしてほしくなかったんですもの」

リトルは小さく首を横に振った。

「それも本心だろうけど、よく考えて、メアリー。君は何をしたかったの？ 何で君はここにいるの？」

—— 小さいのに、立派なのね。一人で国境を越えるんでしょ？

—— 君こそ、『こんなところで何をしてるんだい』

リトルはメアリーの方を向き、メアリーの手をそっと両手で包んだ。
「行こう。君がいるべき場所はここじゃない」

メアリーは小さな両手をぎゅっと握り締めると、意志の強い瞳をリトルに向けた。

「ついてきてくれるでしょ？ リトル・ウィット」

リトルが頷くと、メアリーはゆっくりと歩みを進めた。

メアリーは頭を抱えている紳士の前に立った。

紳士は頭を床に向け、俯いたままだった。

「私、ほんとうはピンクは好きじゃないの。ふわふわしたレースとか、リボンとか、夢見がちな童話の本なんかより、ミステリーとか、星の図鑑とかが好きなの」

眉の端を下げて、小さな手を力いっぱい握り締め、メアリーは座っている紳士の頭を見下ろす。

「でも、どうして私がそれを言わなかったか分かる？ ピンクのウサギやブルーのクマのぬいぐるみを、どうしていつも大切にしていたか分かる？」

メアリーはブルーの大きな瞳を潤ませた。

「大切だったからよ。私の好みなんて知らなくて、いつも仕事ばかりで家にいなくて。でも、帰るたびにプレゼントをくれるってことは私を愛してるって事でしょう？ だから、フリルのドレスも、大きなぬいぐるみも、とっても大切で、好きだったのよ。いつも真剣に悩んでプレゼントを選んでくれていたんでしょう？」

メアリーの瞳から涙の粒がこぼれた。

「私はもうそんなに子供じゃないのよ？　今回だって、いつも私がほったらかしにされてるのを怒ってるのに気づいていて、仕事を一生懸命つめて旅行に連れて行ってくれたんでしょ？　私は旅先でもずっとふくれてたけど、ほんとうはすごく嬉しくて、楽しくて、周りのもの全てがキラキラして見えて。最高のプレゼントだったわ」

メアリーはその場に膝をつき、紳士と顔の高さを同じにした。

「ねえ、なのにどうしてそんなに悲しそうなの？　私が楽しいって思ってること、気づいてたでしょ？　私が嬉しくてたまらないけど、恥ずかしくて言わないってこと、分かってたでしょ？　どうして楽しかった思い出を全部無かったことにしてしまうの？」

メアリーは紳士が頭を抱えている大きな手に、自分の手をそつと重ねた。

「――パパ」

リトルはゆっくりと歩み寄り、メアリーの手に自分の手を重ねた。

メアリーはリトルを見上げ、涙をこぼしたまま、とろけるように微笑んだ。

「ねえ、リトル。私は愛しているわ。この世の中の全てを、愛してる。だから……」

メアリーはリトルに両手を伸ばして、そのままリトルの方に体重を預けた。

「だからね……さよなら、リトル。私だけの、リトル・ウィット」
耳元でそう囁く声が聞こえた。

ツインテールが靡き、メアリーの身体がリトルに触れる寸前で、メアリーは溶けるように消えていった。

「さよなら」

紳士ははっと顔を上げた。
見ると、少年が目の前に立っていて、自分の手にその小さな手を重ねていた。

がたん、と音がして二人が床を見ると、大きなトランクがいつのまにか開いていた。
その大きな口から、ピンクのウサギやフリルのドレス、レースの小さな帽子がこぼれていた。

「……メアリス……？」

紳士は銀行強盗犯の銃弾に倒れた亡き娘の名を呟いた。

気づくと、少年がこちらを見つめていた。少年の口が小さく動き、不思議な響きの声が入を通った。

「本当に彼女は可哀想な人生だった？」

紳士が驚いて少年を見上げ、口を開こうとすると、

「ならどうして、彼女は微笑んでいるの？」

少年は静かな言葉を残して、立ち去った。

ゆっくりと瞳を閉じると、不思議なことに、メアリスが生まれた頃からどんどん大きくなっていく様子を鮮明に思い出せた。

背が伸びて、髪が伸びて、少し照れ笑いをしたり、怒ったり、膨れてそっぽをむいたり。

十歳の記憶までいくと、メアリスは急にこっちを向いて、ちょっと照れたように俯いた後、ツインテールを揺らしながらにっこりと微笑んだ。

その姿を呆然と見つめていると、そのままメアリスの姿は静かに消えていった。

足元にこぼれていたピンクのウサギがパタリ、と倒れた。

六章 もうこのバスで再会することは無い

リトルは停車しているバスに背を預け、煙ったい砂地の上に立っていた。

「迷子の坊っちゃん、もうじき警察が来るけれども、君はこのままいていいのかい？ 身元確認なんてされても大丈夫なのかな」

いつの間にかアレイがそばに立っていて、意地の悪い笑みを浮かべていたので、リトルはあからさまに嫌そうな表情を浮かべた。

「ご心配なく。それなりに立ち回るさ」

そう言ってからリトルはアレイを見上げ、眉間にシワを寄せた。

「お前、何者だ？」

「何者……か、そう訊かれれば非常に返答に困るね。不変者？ 世に有らざる者？ 世界の傍観者？ とてもこの世の言葉では表しつくせない。それとも何か、坊っちゃんは何タシに未知なる言葉で説明する事を要求するかい？」

冗談めいた言葉を並べるアレイに、リトルは不服そうに顔を背けた。

「メアリーの前とはずいぶんと言ひ回しが違うようだな」

「申し訳ないね、ワタシは『定まらない者』なんだ。仕事柄、色々
と『吸収する』のでね、自分の性格も、行動も、まとめられない。
したがって、言論さえ、まとめられない」

「生憎、お前と言葉遊びをする気はない」

リトルがため息をついて言うと、アレイは楽しそうに笑った。

「まあ、今の自分を一言で表現するならば……ワタシはFBIさ」
言うとおろ、アレイが出した手帳にはFBIの証が記されていた。

リトルが驚いたように目を丸くしていると、アレイはリトルの心臓
の辺りを指差した。

「服、破けてるよ。あの男、運転の腕は最悪だけど、射撃の腕はな
かなかだったようだね」

見ると、リトルの心臓の辺りの服に穴があいていた。

「ま、あの至近距離で当たらない方が不思議だけどね」

リトルは穴を覆うように自分の心臓に手を当てた。

「貴様、何者だ」

「さっきも言った通り、FBIさ。今はね。けれど、キミの質問に
答えるとしたら……」

アレイは少年の容姿に似合わぬ大人びた笑みを浮かべ、自分の胸を
親指で指した。

「キミとワタシは同類だ」

アレイはリトルの隣に立ち、バスに背を預けて砂漠の遠くを見つめた。

「一度繋がってしまった縁はなかなか切れない。坊っちゃんとはきつとまた会うだろうな」

「ふん、迷惑だ」

「ありやうや、会ったばかりなのにずいぶんと嫌われちゃったもんですねい」

「ボクはファーストインプレッションで全てを決める性質でね」

「そんな冗談を言ってくれるほど仲良くなれたことを光榮に思うよ」

「その口、縫うぞ」

「それはカンベン」

アレイは手をひらひらと振って涼やかに笑った後、バスのほうへ向かって歩いて行った。

アレイがバスの中に消えてから、リトルは不機嫌そうに腕を組んだ。

「ふん、食えん男だ」

—— ふふ、眉間にシワなんか寄せちゃダメよ、リトル。

隣から声が聞こえた気がして驚いて自分の左隣を見ても、そこにはただ砂地が広がっているだけだった。

リトルは少し首を傾けて、瞳を細めた。

「忘れないよ、メアリー。また巡り会うその日まで、忘れないよ」

——だからそれまで……さよなら。

——「粹、なに書いてんの？」

ふと声を掛けられ、声のするほうを見ると、制服の上着を椅子の背もたれに掛けながらこちらに視線を向けている藤巻英人がいた。

粹は書き終えた手紙を丁寧に折って、真っ白な封筒に入れた。

「……少しだけ、昔を思い出していただけさ」

粹は封筒を見つめた後、机に置いていたマッチを手に取り火をつけた。

火を封筒にうつすと、封筒は端の方からゆっくりと燃えていった。

「あれ、手紙……送らないの？」

英人が不思議そうに聞くと、粹は燃える手紙を灰皿に置き、机に頬杖を付いて瞳を閉じた。

「ああ」

黒い灰皿に置かれた燃える手紙を見て、英人は優しく微笑んだ。

「楽しそうだね」

「楽しそう？　なぜ？」

粹が目を開いて不思議そうに見返すと、英人はからかうように笑って、自分の眉間に指を当てて見せた。

「いつもみたいに気難しい顔してないから」

粹は虚を突かれたように目を丸くしてから、

「ああ」

手紙を愛おしそうに見つめ、少し微笑んだ。

メアリー、そっちも楽しんでるかい？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9507j/>

ATLAS — 《 L 》 Letter Of You （君に捧ぐ手紙） —

2010年10月10日04時46分発行